

第2回検討委員会での委員意見まとめ（検討テーマ別）

※「意見の性質」欄に網掛けしてあるのは【資料1】に抜粋した意見。

令和3年12月16日  
学校・家庭・地域の協働体制検討委員会  
資料2

検討テーマとの主な関連				意見の性質			内容	発言分野
①	②	③	④	現状	課題	方向性		
●				●			「子どものため」となると減らすことはできない。あれもこれもで増え続け、学校は飽和状態。	教員の多忙化
●				●			なんとなく先生方が忙しいことは分かるが、何が忙しくてどんな支援が必要か分からない。	教員の多忙化
●				●			地域の人も仕事を持っている場合が多く、学校が要求ばかりしてはいけないのではと考えてしまう	教員の多忙化
●				●			子どもを対象とした事業を学校の枠以外でやっても、参加者が集まらないため、つい学校の中でできないか考えてしまう	教員の多忙化
●				●			学校の門が閉まっていたり、地域の団体が使用できる部屋も減っていて物理的に協働が行いにくくなっている	連携困難要因
●				●			コロナ禍は教育活動や地域活動などについて、本当に必要なことを考える機会となった。	学校の専門性
●				●			中学校では生徒を主体的に動くように育てていく視点もあり、小学校とは地域との関わり方が大きく違っている	小・中の違い
●				●			共通の課題もあるが、各学校の特色の中の困りごとも多いと考える	学校課題の個別性
●				●			地域の人材不足に対して、武蔵野市民科などは地域への愛着を育むことにつながる	担い手育成
●					●		押し付け合いではだめ、誰がやるかで子どもにどんなメリットがあるかなど、体系的に考える必要がある。	学校の専門性
●					●		学校ができることの専門性は何なのか、お互いに専門性を持ち、互いの専門性を生かし合うことが必要	学校の専門性
●					●		これまでやってきたことを諦める必要があるということを真剣に考えていかなければいけない	学校の専門性
●					●		助けてもらう部分と、学校が責任を持って行う部分、整理が必要	学校の専門性
●					●		教員がやるべき仕事とそうではない仕事を分けて、それが子どものよりよい学びにつながるという視点	学校の専門性
●					●		コミュニケーションするにはお互いに忙しすぎる。減らすものは減らす。必要なものをどう絞っていくか。	学校の専門性
●					●		持続可能な部活動とするためにも、連携するための仕組みは部活動から導入して欲しい	部活動
●						●	ひと学級の人数が多くて大変だと思うが、学校の先生方には一人一人の子どもたちをよく見てもらいたい。	学校の専門性
●						●	子どもたち自身が「何をしたいか」の声をどのように拾ったり、表明させたりしていくかという視点	子どもの権利
	●			●			地域との連携や地域からの反応を直接受け取ることは子どもたちにとっても非常に貴重な経験となる	連携・協働
	●			●			個人のアドレスや携帯番号を、各教員に知らせ、直接コミュニケーションすることでスムーズな連携につながった	連携・協働
	●			●			先生方からの依頼は電話や対面がほとんど。メールよりも細かいニュアンスが伝わる	連携・協働
	●				●		すでに教員は多忙で、これ以上新しいことを求めることは現実的に難しい	教員の多忙化
	●				●		「要望」は余裕があって考える時間があれば出せるが、忙しい教員からは出にくい。	教員の多忙化
	●				●		管理職としては、教員にこれ以上勤務を増やすような要求することは難しい。	教員の地域連携
	●				●		教員も家庭をもつ一個人であり、管理職の立場で教員にこれまで以上の働きを求めることは困難	教員の地域連携
	●				●		準備等にかかる時間もあり、教員が学校の外に出ていくことの難しさがある	教員の地域連携
	●					●	校長・副校長だけでなく、各教科や担任の先生も地域と接点を持つことが重要	教員の地域連携
	●					●	それぞれの先生方が地域とつながるスキルを高めていくことが必要	教員の地域連携
	●					●	地域と関わることで教員自身の視野も広がり、連携もスムーズになる	教員の地域連携
	●					●	教員自身が地域とつながる楽しさや達成感を感じて取り組めることも必要	教員の地域連携
	●					●	教員に対するコーディネート能力の向上研修なども必要	教員の地域連携
	●					●	「努力」や「子どものため」でごまかしてはだめ、教員の負担軽減をシステムとしてサポートしていく必要がある。	教員の負担軽減
	●					●	今も地域コーディネーターとは良い関係があるが、支援や活動の継続性という視点で体制づくりをする必要がある。	活動の継続性
	●					●	学校・家庭・地域それぞれに強みがある。これをうまくコーディネートすることが必要。	活動の多様性
	●					●	地域コーディネーターが複数いれば、それぞれの得意分野を生かした活動につながるのではない	活動の多様性
	●					●	数百世帯の保護者がいれば、それぞれに強みがあり、もっと様々な活動ができるはず	活動の多様性
	●					●	【学校⇄地域または家庭】連携の矢印は一方通行ではだめ、逆のベクトルをいかに増やしていくか	連携・協働
	●					●	協働するための障壁になっているものがあるとすれば、それをいかに取り除いていくか。	連携・協働
	●					●	連携のためには我々大人が4つのC（Creativity、Critical Thinking、Communication、Collaboration）を獲得することが必要	連携・協働
	●					●	学校からの依頼を地域が請け負うという構図ばかりでなく、日常的なコミュニケーションが非常に重要	連携・協働
	●					●	子どもたちが思考・判断したことの実現を、地域を意識して行い、子どもを通じて学校と地域がつながる	連携・協働
	●					●	社会関係資本醸成のために、人が集まる場では大人も学び続けていくことが必要	大人の学び
		●		●			保護者の方とのディスカッションが、取組みを進める決断を助ける	情報発信・共有
		●		●			取組みなどに対する理解を得ることは、協力を得ることにもつながる	情報発信・共有
		●		●			開かれた学校づくり協議会で議論や情報提供がされているだろうか	情報発信・共有
		●			●		地域とともに学校をつくっていくためにも開かれた学校づくり協議会をいかに充実させていくかが大事	開かれ充実
		●			●		どの授業でどんなことをしているかなど、学校から話を聞かなければ分からないことがたくさんある。	情報発信・共有
		●				●	開かれた学校づくり協議会をより学校経営に踏み込んでいただくことが必要ではないか	開かれ充実
		●				●	なんでも言い合える信頼関係づくりが必要	信頼関係
		●				●	日常的なコミュニケーションや、お互いの信頼関係を築きやすいシステムにしていける必要がある	信頼関係
		●				●	学校から情報を発信していくことはとても重要	情報発信・共有
		●				●	地域からも情報を語ることでできる場所が大事	情報発信・共有
		●				●	単発、突発ではなく、ストーリーの中で、学校からの要望があると地域としてはありがたい	情報発信・共有
		●				●	教員は教育のプロ。ただし見えていない視点があるかもしれず、会話を重ねていく必要がある。	情報発信・共有
			●	●			PTAを持たない保育園を選ぶ保護者もいる。	保護者・PTA
			●	●			「家庭（保護者）」としてひとくくりにはできない多様な形がある	保護者・PTA
			●	●			子どもたちを育てていくことに関わりたい大人は、探せば地域の中に必ずいる	担い手
			●	●			保護者としては自分の子どもをどうしたいかということを考えてしまう	保護者・PTA
			●	●			PTAはすべての保護者の代表ではなく、PTA役員もむしろ少数の保護者の姿	保護者・PTA
			●	●			（PTA）PCが自宅にないことを理由にPTA役員を担うことができない方がいる	学校リソース
			●	●			個人のポケットWi-Fiやテザリングで行っている業務もある	学校リソース
			●	●			組織として使用しているWi-Fiを開放することはセキュリティ上難しい側面がある。	学校リソース
			●		●		PTAや特定の役員だけでなく、その他の多くの保護者との共通認識も重要である	保護者・PTA
			●		●		各団体とも担い手不足の中で、また新たな立場で学校との連携に携わってもらうことには課題がある	担い手
			●			●	地域の中の学校、学校のリソースを社会にどれだけ開放できるか、できるものでないものの整理が必要。	学校リソース
			●			●	自分たちの活動が子どもたちや先生の役に立ったという満足感が、次の活動のモチベーションにつながるという好循環があるとよい	活動動機
			●			●	開かれた学校づくり協議会をやることで、変わっていくことを見える化していくことが必要ではないか	活動動機
			●			●	連合体が機能することで他地区での取り組みを参考にするなど、各コミュニティが力をつけるための支援につながる	担い手